

神聖な丸い餅

餅とは本来は丸いもので、餅を切ることでさえ不吉と忌まれるほど、その丸い形が神聖なものと考へられていました。正月にお供えした鏡餅を割って皆で食べる鏡開きも、「切る」や「割る」という言葉は縁起が良くないとして避けられてきた表現です。

餅が正月のご祝儀として用いられるようになったのは平安時代からとされていますが、正月の鏡餅のほか、3月3日（上巳の節句）の草餅、5月5日（端午の節句）のチマキまたは柏餅、旧暦10月亥の日の亥子餅など、餅と節句との関わりは深いとされています。節句は「節供」とも書き、1年間の無事を願って重要な節目ごとに行うお祭りです。

高島市でのならわし

高島市でも昔から餅や団子が祭りごとやお供養などのために作られてきました。正月には鏡餅をお供え、また地域によっては小さな団子を木の枝に飾った餅花を神棚にまつり、山の神様に斧・鋸などの道具と一緒に十二月神餅をお供えして、豊かで安全な1年になるよ

祭りの陰の主役

お守りとしても

大切にされてきた餅

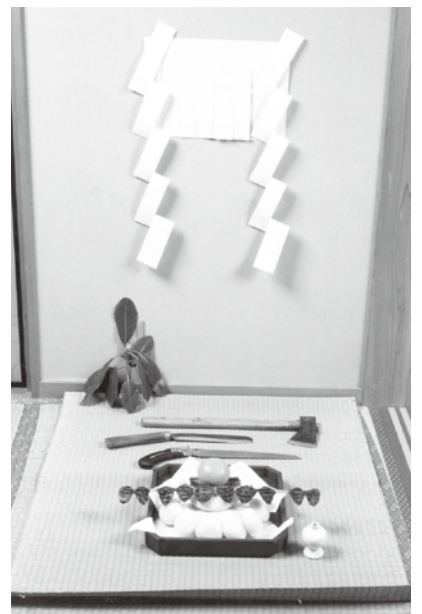
う祈ります。

2月〜3月頃にかけては、各地域の寺院で涅槃会の法要の後に団子撒ぎが行われます。撒かれるのは紅白の団子、鮮やかな3色の団子などさまざまで、お下がりをいただく農作業や山仕事の際のムシ除けになるといわれています。そして、無病息災を願って布や毛糸で編んだ小袋に入れて、お守りにしました。また、ころころさん（ころころ団子）と呼ばれるお供え団子は、8月のお墓参りのほか、地域によっては2月の涅槃会、8月16日のお盆の送り団子、8月23日の地藏盆などにも作られます。団子のお下がりはそのままで食べるほか、レース糸につないで腰から下げ、やはりマムシ除けのお守りとなりました。また春祭りの宵宮（前夜祭）に

は、よもぎ団子をこし餡で包んだ宵宮団子（ヨミヤ団子）を持った子どもたちが、「明日のお祭りに来てください」と招待客の家まで案内に行くならわしがあります。

秋祭りには1年の豊作を感謝して、山の神様に鏡餅一重ねを、葉付き大根・丸ごとの小魚などと一緒に供えます。稲刈りを全て終えた後、田の神様の亥の子祭りには、もち米を使ったおはぎなどが作られました。

現代では、餅やそれを加工したお菓子なども手軽に買うことができますので、身近な食べ物になっています。時には餅が大切にされていた昔からの伝統を思いながら、ゆっくり味わってみるのもいいかもしれません。



十二月神餅のお供え

編集感

今年の初詣は、約800段も続く石段で有名な大津の立木観音へ。4歳の娘が自分一人で階段を登りきった姿を見て「この間までよちよち歩きやったのに」と思いつつ成長を実感しました。▼今号の特集は成人式をとりあげました。いろいろな新成人がおられますが、しっかりとした夢や地元愛を語られる方もおられ胸が熱くなりました。皆さんの夢が実現できるよう祈っています。▼娘の成人まで後16年。夢のある大人に成長してほしいものです。(S)

閩文化財課 ☎(32) 4467

※参考文献※
 ・『滋賀県の伝統食文化 滋賀県伝統食文化調査報告書 平成6年度〜平成9年度』
 『滋賀県伝統食文化調査 資料編』
 （ともに1998年／滋賀県教育委員会）
 ・『マキノの里山語りやんせ』
 （2004年／マキノ町）

